

フレーベルにおける象徴的自然観の問題

榊 原 志 保

Das Problem der sinnbildlichen Naturanschauung bei Friedrich Fröbel

SAKAKIBARA Shiho

序

幼稚園の創設者フレーベル (Fröbel, Friedrich Wilhelm August, 1782-1852) は、彼が独自に発展させた「恩物 (Gabe)」や『母の歌と愛撫の歌 (Mutter- und Koselieder)』などの教材を教育の営みに取り入れることによって、人間の合自然的な発達を導いてゆくことができるとした。しかし、それら教材の使用において意図されている陶冶的意義は、彼に固有の自然観によって理論的・原理的に基礎づけられているのであり、この自然観の内容からしてはじめて理解され得るものである。小論は、ヴァイゼによって先鞭がつけられ、その後の遺稿研究の一方方向を決定づけたところの、このようなフレーベル教育学理解の視角から、彼の自然観を象徴的自然観として特徴づけて捉え、その内容を明らかにしようとする試みである。

フレーベルの自然観が彼の教育思想を支える基礎として見られねばならないことを実証的に明らかにしたのは、ヴァイゼによる未公開の博士論文¹⁾である。彼は、フレーベルの自然観の発展過程を時代の自然哲学的思想潮流との影響関係において分析し、フレーベルの自然観を基礎づけている哲学的立場の独自性を強調した。ために、それ以来、教育学的著作を発表する以前のフレーベルの哲学的思索が注目され、研究対象とされてきた。その過程で開拓された一連の遺稿研究がこれまで、「球体法則 (das sphärische Gesetz)」構想など、フレーベルの思想を支える独自の哲学的思想内容の輪郭を明らかにしてきたのである。

管見によればしかし、諸研究の多くは専らフレーベルの自然観の形成過程を跡づける歴史的アプローチをとるものであり、その一方で、フレーベルの自然観そのものを、彼自身の記述に拠りながら体系的に明らかにしようとする、いわば体系的なアプローチは、これまでほとんどなされてこなかった。その理由としては、第一に、フレーベル自身が、自己の思想形成過程について折に触れて多くを語っている²⁾ことから、自伝的研究が逸早く展開し、それにしたがって、フレーベルの思想形成過程と時代の様々な哲学・思想からの影響関係をめぐる分析への多くの興味が呼び起こされてきたことが挙げられよう³⁾。しかし第二には、その反面で、自己の自然観そのものについてのフレーベル自身の記述が、断片的、比喩的なものにすぎ、体系的、論理的なものではないために、分析に必要な資料状況に問題があると考えられてきたことが挙げられる。

しかし、歴史的アプローチによって、フレーベルの自然観形成過程における時代の哲学・思想

からの影響関係についての検討が重ねられてくるなかで常に確認されてきたのは、時代のいかなる哲学・思想体系にも完全には還元され得ない、彼の自然観の固有性である。彼自身、いかなる哲学体系にも依存せず、独自の哲学的立場に基づいて自然に関しての自立した思索を続けてゆくことを表明し、自らを「(真の) 自然論者 (Naturalist)」と呼ぶことをはばからなかった。とすれば、彼の自然観そのものを明らかにしようとする体系的アプローチもまた、彼の教育思想を、世界観的な大枠から理解するために是非とも必要な作業の一つであろう。

それでは、①フレーベル固有の自然観の形成を基礎づけたところの彼独自の哲学的立場とは、いかなるものであるのか。②彼が、独自の哲学的立場に基づいて自然に対するとき、それは彼にとって、いかなる自然として立ち現われてきたのか。③彼独自の哲学的立場に基づいて自然を観るというのは、いかなる観方なのか。小論の課題は、フレーベル固有の自然観を、今日入手可能な限りでの資料に拠りながら、以上の問いに答える形で明らかにしてゆくことにある。

さて、われわれはここで、フレーベルが、いわゆる彼の「幼稚園教育学」の形成に先立つスイス時代 (1831-36) の書簡群において、「生命が再び象徴的な観方を得ること」の重要性について盛んに語り、その理由として「まず第一に我々を自然現象として取り巻いているものの全て、そしてまた、人間の精神、心情、生命から出てきたものの全ては、象徴的な意味をもっている」(傍点筆者) と述べていることに注目したい⁹⁾。というも、この言明においてこそ、フレーベル自身による自己の自然観の特徴づけが表明されていると思われるからである。それゆえに、上記の課題を解明すべき以下の分析は、この言明において一体いかなることが言われていたのかということを探究し、確認する作業に集約されてくるであろう。

そこで、小論の論述は、以下の順序で進行する。第一章で、フレーベル独自の哲学的立場を基礎づける「球体法則」構想の原理的内容を際立たせて解説し、第二章で、「球体法則」構想によって原理的に基礎づけられ、導き出されてくる「自然」の姿はいかなるものであるかということをも明らかにし、そのことを通して、フレーベルにおいて、何故に「自然現象として我々を取り巻いているもの」が「象徴的な意味を持っている」と言われるのか、その根拠を検討する。ここで、フレーベルにおいては、「自然」は、「象徴的な意味」に満ちたものとして捉えられ、人間に対して「自然」をそのように観ることが要請されてくる¹⁰⁾ことが明らかにされるであろう。

第一章 象徴的自然観の原理的根拠としての「球体法則」構想

まず、フレーベル固有の自然観形成の基礎となったところの彼独自の哲学的立場とはいかなるものかという問いを解明するために、われわれは、彼によって「球体法則」と名づけられた宇宙論的構想を思い起こさなければならない。彼の主著『人間の教育 (Menschenziehung)』(1826) 冒頭部に表明されているように、彼にとって、全宇宙の根底には、唯一の「法則」が存在し、この「法則」によって全てが秩序づけられて捉えられるからである。

「球体法則」の構想は、宇宙におけるあらゆる現象を統一的に把握するための原理を求めていたフレーベルによって、「精神の啓示」として受け止められて記述された、一連の形而上学的宇宙論である。しかし、数学的表現を直観的理解のための手段として記述されたその内容は非常に思弁的なものであり、また、テキスト自体が断片的であるために、連関が不明で理解不可能な箇

所も散見される。そのため、これまで、少なくともフレーベル固有の自然観を主題とした諸研究のなかで、「球体法則」構想のテキストに真正面から取り組んだものはほとんどなかった。けれども、自然観を含めて、フレーベルの世界観の哲学的な基礎づけが「球体法則」の構想において見い出され、しかもそれが彼の終生にわたる思索と活動とを規定する根本原理であり続けたということについては、ボーデによる立ち入った遺稿研究⁹⁾以来、既に久しく確認されてきている⁶⁾。とすれば、フレーベルの自然観の内容を体系的に明らかにしようとする小論においても、「球体法則」構想の内容を読みといてゆく作業を避けて通ることはできないであろう。故に、まさにこの作業が、小論の第一の課題となるのである。

以下まず、今日入手可能な資料⁷⁾に基づき、「球体法則」構想の全体的概略を簡潔に示して、フレーベル独自の用語間の意味連関を明らかにし〔第一節〕、その上で、フレーベルの自然観を基礎づけるものとして重要であると思われる三つの根本的な原理の内容を解説する〔第二節〕。

第一節 「球体法則」構想の全体的概略

「私が語るのではない、精神 (der Geist) が私を通して語るのである……」と書き始められる「球体法則」の草稿断片は、「精神の啓示」の記述として、①「絶対的な統一」としての「永遠なるもの (das Ewige)」の存在と性質の定義を論理的な出発点とし、②この「永遠なるもの」が「絶対的な対立」へと分かれ出てゆく「現出 (das Heraustreten)」の原理を述べ、③その結果生じてくる各々の「現出契機 (Heraustretungsmoment)」並びに「現出点 (Heraustretungspunkt)」における「再統一」への「努力 (Streben)」を「自然的に導出 (natürlich ableiten)」して説明するものである⁸⁾。

(1) 「永遠なるもの (das Ewige)」の存在と性質の定義

「永遠なるもの」は、「一者 (das Eine)」であり、「自己自身に等しいもの (das Sich-selbst-Gleiche)」であり、「いかなる差異も無き (ohne irgend eine Differenz)」ものである⁹⁾。そこにおいては、この経験世界でみられるあらゆる対立は止揚されている。この状態は、点 (それはしばしば x として表示される) 或いは、球を表わす円とプラス・マイナスの記号で表示される¹⁰⁾。「永遠なるもの」はまた、「絶対的な生命」であり、「絶対的な力」であるとも言われる¹¹⁾。

(2) 「永遠なるもの」の「現出」による「現出契機」並びに「現出点」の成立

「絶対的な生命」、「絶対的な力」である故に、「永遠なるもの」は「途切れること無く、全側面的に、最も絶対的で最も鋭い対立において、……自己自身から現われ出た」¹²⁾。

「永遠なるもの」は、絶対的に対立した (この対立は、プラスとマイナスの記号によって表示される) 側面へと無限に現出し得る。「永遠なるもの」(x) それ自体からの、無限に見い出されるはずの「現出契機」の一つが P と表わされる。あらゆる「現出」は対立において生じるから、 P はすなわち「 $+P$ と $-P$ 」として「現出」する。 $+P$ と $-P$ は、各々「現出点」と呼ばれる。

(3) 各々の「現出契機」並びに「現出点」による「真の統一」: 「球体」実現への「努力」

フレーベルによれば、「分かれたれず一つになっているものから分離してきたもの」は全て、「限定によって制約されている (durch Begrenzung bedingt)」(Tbl. 1811, I. 43b)。よって、まず、各々の「現出契機」(P) は、「現出点」($+P$ と $-P$) という対立状態において「現出」し、次に、「現出点」($+P$ と $-P$) は各々、「外的な生命」($+L$ と表示される) と「内的な生命」($-$

Lと表示される)という対立状態において現われ出てくる。

この二重の対立状態はしかし、フレーベルにおいて、各々の「現出点」(+Pと-P)における「内的な生命」(-L)の「努力(Streben)」によって解消されようとする。そして、この「努力」が成就されたとき、各々の「現出点」(+Pと-P)における「内的生命」(-L)と「外的生命」(+L)との間にのみならず、両「現出点」(+Pと-P)との間にもまた、「真の統一」が得られるのである(Tbl. 1811, I. 47a-b)¹³⁾。フレーベルは、この「真の統一」を求める「内的生命」の「努力」の内容を、数学的表現を媒介として得られる直観の助けを借りて解き進めてゆく。そこにわれわれは、彼の構想する宇宙が、「球体の法則」に則って形成されてゆくのをみることになる¹⁴⁾。というのも、彼は、「永遠なるもの」からの「現出」、各々の「現出」による諸対立の定立と「真の統一」実現への「努力」を、同時に実現されるべき二種の「球体」の形成過程として図示しながら説明してゆくからである¹⁵⁾。フレーベルにとって、「真の統一」は、「球体」によって表示されるのである。

彼は、そこにおいて形成される二種の球体を、「完全に個性的な自立的球体 (eine vollendet individuelle selbständige Sphäre)」ないし「特殊的球体 (eine besondere Sphäre)」と呼び、それら二種の球体の中心点を、共通して ξ と呼んでいる。この時、 ξ は、究極的には確かにxに等しいものではあるが、xの形成する「普遍的球体」の中心点ではなく、+Pと-Pとの合一によって、あるいはまた、+Pと-P各々における+Lと-Lの合一によって実現される「xの周りの独自の個性的球体」(Tbl. 1811, I. 57b)の中心点を意味するために用いられている。 ξ は、「普遍的球体」を規定する中心点であるxと異なって、あくまで「個性的球体」ないし「特殊的球体」を規定する中心点なのである。

第二節 「球体法則」構想における三つの原理的内容

以下では、上に概略した「球体法則」の構想内容のなかから、フレーベルにおける自然観を基礎づけていると思われる三つの原理的内容を際立たせて解説する。

(1) 「永遠なるもの」と各々の「現出点」との関係について

フレーベルによれば、「永遠なるもの」からの「現出」は全て、「一者」であり「自己自身に等しいもの」であり「いかなる差異も無き」ものが、幾重もの対立関係のなかへと現われ出てゆくことを意味していた。ここで、このことを彼が、「普遍からの特殊の現出」と表現している(Tbl. 1811, I. 43b)のに注目したい。「永遠なるもの」と各々の「現出契機」(P)並びに各々の「現出点」(+Pと-P)との関係は、端的に、「普遍」と「特殊」の関係として捉えられるのである。この表現によって、どのようなことが考えられているのだろうか。

第一節においてわれわれは、「永遠なるもの」(x)が「普遍的球体」を形成するのに対して、「現出契機」(P)並びに各々の「現出点」(+Pと-P)は、「個性的球体」ないし「特殊的球体」を形成しようと「努力」するように定められていることをみた。われわれは、まずはここに「永遠なるもの」(x)と、各々の「現出契機」(P)並びに「現出点」(+Pと-P)との間の関係が、「普遍」と「特殊」の関係と言われる所以を見て取ることができる。しかし問題は、それによって一体いかなることが意味されているのか、ということである。

「普遍的球体」は、時間と空間とを超越している「永遠なるもの」(x)によって直接的に規

定されている。それゆえに、「普遍的球体」は、時間と空間のなかに現われ出ることはい¹⁶。すなわち、「普遍」そのもの、「永遠なるもの」(X) そのものは、そもそもわれわれの経験世界のなかに外的に現われ出ることはい¹⁶。ところが、「永遠なるもの」(X) は、他方で、「現出」することによって、必然的に「個性的球体」ないし「特殊的球体」を無限に創り出すが、これらは、直接的には「永遠なるもの」(X) から離心した中心点 $\dot{\cdot}$ によって規定され、そのことによって「限定によって制約されている」ために、時間と空間のなかに現われ出る。この時現われ出た「特殊的球体」は、確かにその中心点 $\dot{\cdot}$ の現われに他ならないのだがしかし、 $\dot{\cdot}$ は究極的にはXに等しいものであるから、そこに現われ出ているのは究極的にはXであるとも言い得る。

以上のことをまとめると、「永遠なるもの」(X) それ自体は、時間と空間のなかに完全な形で現われ出ることはい¹⁶が、「個性的球体」ないし「特殊的球体」において、「限定による制約」を通した形で現われ出ることはい¹⁶できる、ということになる。今、われわれが問題としている「普遍」と「特殊」の関係の具体的な意味内容の一つは、このようなものである。

ところで、第一節(3)の註15で図解されたように、「個性的球体」ないし「特殊的球体」は、「Xの周 $\dot{\cdot}$ り」に無限に見い出されるが、それらは、Xに近いものから遠いものまで、一連の階層秩序を成している。この階層秩序は、この際、何を意味するのだろうか。各々の「現出契機」(P)並びに「現出点」(+Pと-P)は、各々の「内的な生命」(-L)の無限の「努力」により、「永遠なるもの」(X) = 「普遍」をより完全に表現することを目指すのである。フレーベルは、一連の「特殊的球体」の系列を、「永遠なるもの」(X) が形成するはずの「普遍的球体」への段階的な「接近(Annäherung)」を表わす階層系列であると解釈する。一つ一つの「個性的球体」ないし「特殊的球体」は皆、究極的には、「永遠なるもの」(X) = 「普遍」の「限定によって制約された」表現形式に他ならないが、それらは、「永遠なるもの」(X) からの距離に基づく一連の階層秩序において、より完全な「普遍的球体」への無限に繰り返される段階的な「接近」を示しながら、「永遠なるもの」(X) を類比的に表出すると考えられるのである。

つまり、「普遍」は「特殊」においてはじめて現われ出るのであるが、各々の「特殊」において類比的に、そして多様な「特殊」の成す一連の階層系列において段階的に、より完全な現われ方を示すのである。「普遍」なくして「特殊」はなく、「特殊」とならない「普遍」もない。

(2) 各々の「現出契機」(P)並びに「現出点」(+Pと-P)の表現形式について

フレーベルは、「特殊」の現われ方について次のように語っている。「普遍からの特殊の現出は全て、……現象(Erscheinung)や形態(Gestalt)という条件のもとにおいてのみ起こり得る。したがってあらゆるPは、完結した、内的かつ外的な生命として現象する。……形態の受容=外的な生命=物理的自然の法則の下への従属」(TbI. 1811, I. 30a)。

フレーベルにおいては、「内的な生命」によって「精神的・道徳的」領域¹⁷が、他方で「外的な生命」によって端的に感覚によって把握可能な「物理的」領域が意味されている。彼は、本来「絶対的な対立物」である両領域は、各々の「現出点」の形成しつつある「特殊的球体」において「一つにされている(geeint)」(TbI. 1811, I. 44a)と言う。この状態が、「現象」や「形態」と呼ばれるのである。「永遠なるもの」が「現出」するということは、空間を超越しているがゆえに眼には見えない「永遠なるもの」(X) に由来する「内的な生命」が、眼に見える物質的な「形態」として現われ出ることであり、それによって「内的な生命」が、「物理的なもの

の法則の下への従属」関係に入るということを意味するのである。

しかしフレーベルにおいてそれは決して「内的な生命」の硬直化を意味しない。むしろ、各々の「現出点」において、「内的な生命」は常に、「永遠なるもの」(x)への回帰を達成すべく、「物理的なものとの戦い」をくりひろげ、「特殊の球体」の実現をめざしつつある。「現象」や「形態」とは、そのような絶えざる「戦い (Kampf)」のなかにある各々の「現出契機」並びに「現出点」の力動的な状態の表現なのである。

ところで、このような意味での「現象」や「形態」を、概念的により明確に規定するために、フレーベルは、それらの目に見える外的な現われを「外的なるもの」(π)と表示し、他方、それに対する「内的なるもの」ないし「精神的なるもの」を、特に ξ と表示し¹⁹⁾、 ξ と π との間に「鏡像反射の関係 (Spiegelungsverhältnis)」が成立していると説明する。「現出契機」並びに「現出点」=「特殊」の表現形式は、「鏡像反射の関係」にある内的な規定 ξ と外的な現われ π とによって成り立っている「現象」や「形態」として考えられるのである。

ξ は、「特殊の球体」を形成して ξ へと「自己自身を再び高めようと」している。 ξ はしかし、究極的には、全てのものがそこに由来しているところの「絶対的生命」=「生命原理」=xに等しいものであった。だとすれば、「特殊の球体」の実現を求めつつある各々の「現出点」の ξ の「努力」は、 ξ へと高まり、更に ξ を経てxへと高まってゆこうとする「努力」でもある。とすれば、「現象」や「形態」として現われ出ている各々の「現出点」は、その「外的なるもの」(π)を通して、「鏡像反射の関係」によって、 ξ を求め、究極的にはまたxを求めて「努力」しつづける姿を映し出しているわけである。

(3) 「統一」の原理について

われわれはここで、フレーベルにおいて、上で述べたような「特殊の球体」の表現形式が、それらにおける「意識 (Bewußtsein)」の由来として考えられていることに注意したい¹⁹⁾。個々の「特殊の球体」における「内的なるもの」(ξ)と「外的なるもの」(π)との間の対立は、「存在的なるもの (das Seiende)」と「非存在的なるもの (das Nichtseiende)」との間の対立としても表現され、この対立項の定立によって、「意識」が生じてくると彼は考えるのである²⁰⁾。

この「意識」は、「内的なるもの」と「外的なるもの」との間の対立が鋭くなればなるほど明確なものになるとフレーベルは言う。この対立は、各々の「現出点」のxからの距離が大きければ大きいほど鋭くなるから、xから離れた「特殊の球体」であるほど明確な「意識」を担うことになる。そして、最も明確な「意識」は、己れの存在の根源であり本質である「永遠なるもの」を「認識する」とされる。

この事態は、逆に考えて見ると、「意識」の成立根拠である対立項をもたないものとしてそれ自体全くの無意識的な精神であったと言うべき「永遠なるもの」が、自己自身の類比的な現われである各々の「特殊の球体」の「意識」というかたちで、自己自身の「意識」に至るということの意味している。このことによって、「永遠なるもの」は、プラスとマイナス、「内的な生命」と「外的な生命」[ないし「内的なるもの」と「外的なるもの」]など「絶対的な対立」への分離を経ながら、その結果現われ出てきた「特殊の球体」の「意識」において再び自己自身へと回帰するのである。まさにここに、フレーベルの求める宇宙の「統一」の原理が成立する。

宇宙の「統一」の原理は、「絶対的な統一」である「永遠なるもの」(x)が「現出」による自

己分裂を経、その結果形成される無限に多様な「特殊的球体」の「意識」という形で益々完全な「再統一」を求める弁証法的な原理である。だが、われわれは以上に述べてきたことから、この過程が二重の事象として説明されていることに注意したい。つまり、この弁証法的な原理によって「永遠なるもの」は、無限の「特殊的球体」の各々並びに一連の階層系列において、一方で「現象」や「形態」として自己自身を徐々により完全な形へと外的に表現することを求め、かつ他方で、徐々に明確な「意識」へと「展開 (entwickeln)」してゆくことを求めるのである。

ところでフレーベルは、「永遠なるもの」(x) から最も遠ざかっている「特殊的球体」、すなわち最も明確な「意識」を手に入れた「特殊的球体」が人間であると言う。その意味で人間は、宇宙の「統一」原理を成す上述の二重の事象を類比的に示す自己の「精神的なるもの」(ξ) の「努力」によって、最も完全に宇宙の「統一」を達成し得ることになる²⁰⁾。

第二章 フレーベルにおける象徴的自然観

第一章で明らかにされた「球体法則」構想による宇宙を、そこに特別な位置づけをもたされる人間の立場から観察するとき、それはどのようなものとして現われてくるのだろうか。「球体法則」という形而上学的根本構想における論理を原理的基礎づけとして、現象世界の全体、ひいては経験世界の全体に対する解釈枠組みを導き出してくるフレーベル自身の思考様式にしたがって、われわれは更なる分析を進めてゆかなければならない。

以下では、第一章で際立たせた「球体法則」構想の三つの原理的内容に抛りながら考察を進め、フレーベルにおいて何故に「自然現象として我々を取り巻いているもの」が「象徴的な意味をもっている」と言われるのか、その根拠を明らかにしたい。

(1) 「自然現象として我々を取り巻いているもの」に対する二つの観察様式

フレーベルにとって、「永遠なるもの」の「現出」の結果である「現象」や「形態」の全ては「自然」である²¹⁾。したがって、第一章、第二節の(1)及び(2)において明らかにされた原理によって、次のことが言える。①「自然」における「現象」や「形態」の全ては、「永遠なるもの」に対して、「特殊」の「普遍」に対する関係にある。②「自然」における「現象」や「形態」全ての「内的なるもの」(ξ) は、究極的に「永遠なるもの」(x) に等しい。③「自然」における「現象」や「形態」全ての「外的なるもの」(π) において、ξの絶えざる「努力」により、「永遠なるもの」が、絶えず無限の「接近」を示す諸段階において、類比的に映し出されている。

このような「自然」を人間の立場から観察しようとするとき、さしあたり、二通りの観方が考えられる。というのも、ξもπも共に、究極的には、共通の存在根拠であるxを現わしているが、自己自身ξとπから成る人間にとっては、両者が共に「実在的な (real)」ものと受け取られるために、「自然」の「現象」や「形態」に対して、それらのξに注目して観察するか、πに注目して観察するかによって、二つの観察様式が成立することになるからである。フレーベルは実際、各々の観方に応じて、人間にとっての「自然」の現われ方を異なった仕方でも説明している²²⁾。

(2) 「象徴 (Sinnbild)」としての「自然」

しかし本来、ξとπとは「鏡像反射の関係」において常に相互的に一体のものなのであり、決して各々自立的に「実在」しているものではない。したがって、両者は、あたかも各々が独立的

に「實在」しているかのように観察されるべきものではないのである。ここに、フレーベルによる固有の「自然」観が主張されてくるところの、そもその所以がある。彼にとって、 ξ と π といういわば二つの側面をもつ「自然」を、その二側面の関係の在り方に沿った真の姿において捉えることのできる新たな観察様式が探られなければならなかったのである。

確かに、一方ではフレーベルもまた、人間にとって、人間を取り巻いている「自然」は、まずは外的に知覚可能な限りでの「形 (Form)」や「形態」として²⁶⁾、「全て、感覚的に捉えられるもの」(TbI.1811, II, 8a)として現われているものであることを認める。しかし他方で彼は、「自然」における ξ と π との分離は「仮象 (Schein)」であるにすぎず、それらは本来一体のものであり、一体であることによって「永遠なるもの」を啓示しているものであるはずだ、と主張するのである。この時フレーベルにとって、「自然」は、外的に把握可能な限りでの「形」や「形態」に等しく、それ自体は「外的なもの」、「死せるもの」なのだが、しかし同時に、その「外的なもの」は、物質的な外面 (π) を通して、その外面の在り方や現われ方を規定しているところの「生ける」内面 (ξ) を指し示しているという理由で、「意味」を持っていると考えられる。そして、このようにみられたときの「自然」は、「意味 (Sinn)」をもった「像 (Bild)」であるから、「象徴 (Sinnbild)」と言われ得るのである。

ここでわれわれは、 ξ と π との関係そのものが、第一章、第二節の(1)で述べた「普遍」と「特殊」の関係に等しいものとして考えられていることに気がつくであろう。人間を取り巻いている「自然」は、その外的な現われである「形」や「形態」としてはあくまで「特殊」なのであるが、しかし同時にそれらは、「普遍」そのものをより完全に表出しようと「努力」しながら、「普遍」の完全な表出への「接近」を示しつつあるその「特殊」な現われにおいて「普遍」を「啓示」している。このことをフレーベルは、「自然の多様な個別現象の象徴的な意味 (sinnbildliche Bedeutung)」として語ったのである²⁵⁾。

(3) 「自然の多様な個別現象の象徴的な意味」が啓示される三つの契機

先に述べたように、 ξ も π も共に人間にとっては「実在的な」ものであるから、「自然の多様な個別現象の象徴的な意味」は、上述した二通りの観察様式に応じて、人間に対していわば二つの階層系列において「啓示」されることになる。すなわち、一つは、 ξ の系列、つまり「個性化されたx」ないし「個別精神 (Einzelgeist)」の一連の階層系列であり、もう一つは、 π のそれ、すなわち各々の ξ を反映しているところの外的な「形」や「形態」の一連の階層系列である²⁶⁾。

しかし、上述したごとく、「自然」の個別諸現象・諸形態それ自体は、各々、本来常に、 ξ と π とが一体となってはじめて存在しているものである。ここで、「自然」の個別諸現象・諸形態の各々において、それらの ξ と π とを一つにする当の働きをしているものは、あらゆる対立項を止揚し、調和させようとする「永遠なるもの」(x) すなわち「生命 (Leben)」である²⁷⁾。

以上のことから、「自然」は人間に対して三様の現われ方が可能である。すなわち、第一に、「精神」(ξ)の系列として、第二に、外的な「形」や「形態」(π)の系列として、そして第三に、「生命」の系列として現われ得るのである。だからこそフレーベルは、人間を取り巻く「自然」のこのような存在様式を、xを「永遠の法則」、「神」、「神的なるもの」と書き換えながら、『人間の教育』冒頭部において、次のように表現したのである。「全てのもののなかに、永遠の法則が、宿り、働き、かつ支配している。この法則は、外なるものすなわち自然においても、内な

るものすなわち精神においても、自然と精神とを統一するものとしての生命においても、……常に同様に明瞭に、かつ判明に現われてきたし、また現に現われている。……」²⁹⁾ (傍点筆者)

「〔内的なものである限りでの〕精神」と「〔外的なものである限りでの〕自然」と「〔内的なものと外的なものとを統一するものとしての〕生命」は、それ自体一体の「自然」でありながら、人間にとっては、宇宙の根底にある「法則」が「啓示」される三つの契機なのである³⁰⁾。

(4) 「自然」を「象徴」として捉える観点の固有性

フレーベルが、当代の諸哲学体系の自然観との対比において自己の自然観の固有性を確認しようとした興味深い記述がある³⁰⁾。そこで彼が、時代の諸哲学体系の自然観を分類する指標としているのはまさに、各々の哲学的立場のなかに、彼の言う「自然」の ξ と π に対するいかなる態度が読み取れるか、ということである。彼によれば、大きく分けて以下に挙げる三つのグループがある。第一には、「自然」の π のみに実在性を認めて、 ξ を全く顧慮しない観方をする「唯物論者たち (Matelialisten)」のグループ。第二には、反対に、「自然」の ξ のみに実在性を認めて、 π を全く顧慮しない観方をする「観念論者たち (Idealisten)」のグループ。そして最後には、 ξ と π の両方の実在性を認めて、「自然」を、 ξ と π とが一つになった「生命」($\sigma\phi$)³¹⁾として観るグループである。フレーベルは、この第三のグループを「(真の) 自然論者たち (Naturalisten)」と呼び、自己自身もそこに属するものとして位置づけている。

フレーベルによれば、本来 ξ と π とを一つにする働きである「生命」($\sigma\phi$)であるはずの「自然」は、往々にして、一面的に、ただ単に「物質」(π)として、或いはただ単に「精神」(ξ)としてのみ捉えられてきた。彼にとって、今こそ人間は、「自然」に対するそのような一面的な観方を脱し、「自然」を「生命」($\sigma\phi$)として、その真実の姿に忠実に捉え得る観点を獲得しなければならない。フレーベルにとって、この真実の観点こそが、「自然」を「象徴」として捉える観点なのであり、この観点をもってはじめて、人間の「使命」は成就され得るのである。

ボルノウも指摘しているように、フレーベルにおける「自然」は、デカルト以来、「知」の枠組みを規定してきたところの近代的思考においてそうであるような「自然」、すなわち、人間の精神に向かい合っている外界、ないし人間の精神の外部を意味する「自然」として理解されることはできない³²⁾。そうではなくて、フレーベルにおける「自然」は、むしろ客観的観念論の意味で、またノヴァーリスにも似て、「内」と「外」とのダイナミックな相関関係において有機体的に捉えられる「自然」なのである。

ここで、「内」として表現されるのは、宇宙を創造しつつある不可視的な「力」であり、精神的なるものであるのに対して、「外」とは、このような「内」を反映する「鏡像」である外面を意味している。フレーベルにとって、外的に現われているものには全て「内的なるもの」が宿っているのであり、また外的に現われることのない「内的なるもの」も無い。それゆえに、彼の捉える現象世界にはそもそも近代的な「精神」と「自然」との懸隔は無いのであって、ただ両者を統一しつつある働きとしての「生命」のみが在る。彼にとってアクチュアリティーをもっているのはただ、「生命」といえるもののみだったのである。

しかしだからといって彼が、近代的な「精神」と「自然」が人間に対して現象世界でもっているリアリティーを全く理解しなかったわけではない。むしろ、その反対である。なぜなら上述べてきたように、フレーベルにおいては、人間にとって「外的なるもの」としての「自然」も、

「内的なるもの」としての「精神」も、両者とも「生命」現象を表現する二側面として、まさに眞実の「自然」の「象徴的な意味」を構成しているものとして捉えられているからである。

小論の冒頭でわれわれは、フレーベルが、スイス時代の書簡群において、「生命が再び象徴的な観方を得ること」の重要性について盛んに語ったこと、またその理由として「まず第一に我々を自然現象として取り巻いているものの全て、そしてまた、人間の精神、心情、生命から出てきたものの全ては、象徴的な意味をもっている」³⁰⁾と述べていたことに触れた。以上、小論で説明してきたところからすれば、このことの意味は、既に明らかであろう。

結 び

「自然」の観方をめぐるフレーベルの主張は、「自然」が一大テーマであった時代の思想的状況³⁰⁾において、「(真の)自然論者」として自立的な立場において思考し活動してゆこうとした彼の哲学的自己表明であった³⁰⁾。しかし、これまでみてきたように、彼の自然観を原理的に基礎づける「球体法則」構想は、単に形而上学的宇宙論にとどまるものではなく、「自然」の一分肢である人間に対して、眞実の「自然」の姿を捉えるための観方を教示する理論的な基礎となるものであった。このことは、「球体法則」の形而上学的構想が、『人間の教育』冒頭部ではいわば「世界を内と外との関係から解釈する」根本構想³⁰⁾として表現し直されていることに明らかであろう。「球体法則」を記述するフレーベルの眼が、「神」の視点から「人間」の視点へと転換されたことにより、「球体法則」に則って形成される宇宙は、「内と外との関係」において観られるべきものとなるのである。世界を「普遍」と「特殊」との関係によって説明する「球体法則」構想は、人間の視点から世界を観る際には、「世界を内と外との関係から解釈する」(傍点筆者)態度を要請することになる。そして、この態度が、世界を「象徴的に観る」態度なのである。

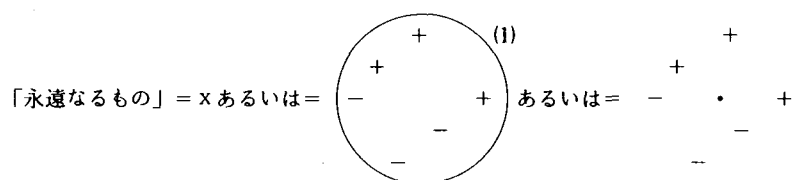
フレーベルにおいて「自然」は、人間にとって、「生命」として、そしてまた「象徴」として捉えられねばならなかった。そして、自らこの「自然」に属するものとしての人間が宇宙における自らの「使命」³⁰⁾を遂行するということは、「自然」を「象徴的に」観る態度を身につけて生きるということの意味するのであった。フレーベルにとって、「自然」の観方の問題は、ただ単に哲学的な認識論上の問題にとどまるものではなく、何よりも人間の生き方に直結し、各々の「生命」の「展開 (Entwicklung)」に深く関わる実践的な問題だったのである³⁰⁾。

それゆえにフレーベルは、彼における教育思想の発展にとって重要な時期をなすスイス時代(1831-36)の書簡群において、「生命が再び象徴的な観方を得ること」の重要性について盛んに語ったのである。フレーベルの独自性は、このように、彼に固有の自然観が、「人間の教育」という実践的課題との取り組みへの哲学的基礎となった点にあると言えよう。この連関をより深く探ることは、今後の課題としておこう。

註

- 1) Weise, Albert, *Die Entwicklung von Friedrich Fröbels Naturanschauung bis zum Jahre 1816. Ein Beitrag zur Entwicklungsgeschichte der philosophischen Ideen Friedrich Fröbels*, Dissertation, Leipzig, 1918.

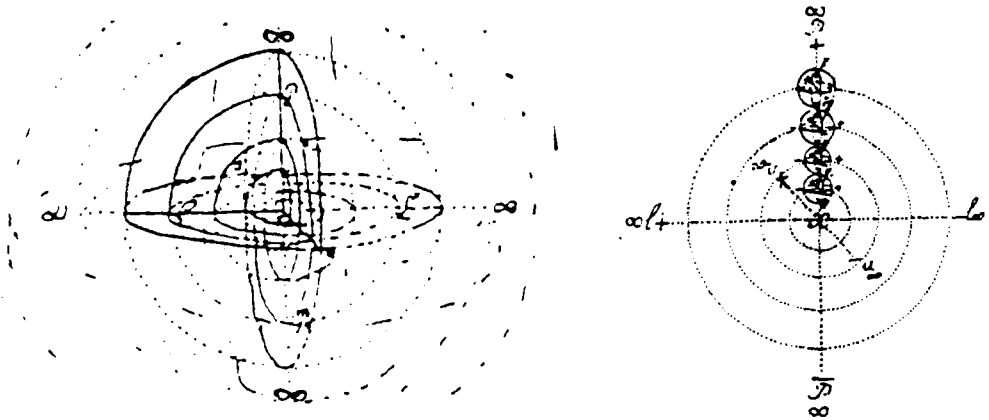
- 2) フレーベルは、多くの自伝的記述において、自己の思想形成過程について語っている。それら資料については、シュブランガーが整理して列挙しているので参照されたい。Spranger, Eduard, *Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt*, 2., erweiterte Auflage, 1953, S. 69, Anm. 2.
- 3) このようなフレーベル研究の動向を歴史的に辿って明らかにした研究として、Heiland, Helmut, *Literatur und Trends in der Fröbelforschung*, Weinheim, 1972. 第2章1-2節を参照。
- 4) Hoffmann, Erika (hg.), *Friedrich Fröbel: Kleine Schriften und Briefe von 1809-1851*, Stuttgart, 4., unveränderte Auflage, 1984 (以下, H I と略記), S. 96.
ホフマンは、フレーベルの「幼稚園教育学」の展開にとって、スイス時代の書簡群に書き記されている思索の数々が重要な意味を持つとして、それらの公刊作業を進めたが、ここでその一部を引用した書簡は、とりわけ女史によって注目され、雑誌論文として逸早く公刊されたものである。Vgl. Hoffmann, Erika, "Die Kraft der Ahnung", in: *Die Erziehung* 15(1839/40), S. 181-198.
- 5) Bode, Maria, "Friedrich Fröbels Erziehungsidee und ihre Grundlage", in: *Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichtes* 15(1925), S. 118-183.
- 6) Vgl. Spranger, a. a. O., S. 42.
- 7) 「球体法則」に関するテキストは、1811~1824年の間に日記帳などに書き記された断片的な記述であるが、その内、今日入手可能な資料として知られているものとしては、ボーデの論文の他に以下のものが挙げられる。① Rinke, Alfons, *Friedrich Fröbels philosophische Entwicklung unter dem Einfluß der Romantik*, Langensalza, 1935, S. 113ff. ② Lange, Wichard (hg.), *Friedrich Fröbels Gesammelte pädagogische Schriften*, Abt. 1, Bd. 1, Neudruck der Ausgabe 1862, 1966, S. 262-264. ③ Hoffmann, Erika und Wächter, Reinhold (hg.), *Friedrich Fröbel: Briefe und Dokumente über Keilhau. Erster Versuch der Sphärischen Erziehung*, Stuttgart, 1986 (以下, H V と略記), S. 309ff.
- 8) このような問題枠組みにおいて既に、神と世界あるいは自然、そして人間の相互関係をめぐって、新たな「真理」が求められていた当時の思想状況を読み取ることができる。
- 9) Tagebuchblätter Fröbels 1811, Mappe I, S. 21a. 以下、フレーベルの Tagebuchblätter からの引用は、略号 Tbl. と、年号につづいて分類番号、頁数によって示す。
- 10) フレーベルは、以下のように表示している (Tbl. 1811, I. 42b).



- (I)の表示は、「統一性と永遠性、そしていたるところそれ自体同一であること、差異無きこと」(Tbl. 1811, I. 42a, b)を表わしている。ちなみに、こうした記号を用いた表示の仕方、フレーベルは、「象徴的表示 (symbolische Darstellung)」とも言っている。
- 11) Bode, a. a. O., S. 128. フレーベルにおいて、「生命」とは、まさに「生の表出」、すなわち「外化への努力 (Streben nach außen)」に等しい。そして、「真なる生命の外化」は全て、「あらゆる側面に向かって均等に空間を満たし、貫き、生命を吹き込み、支配する」(Tbl. 1811, III. 6a, b)。なお、以下、Tbl. からの引用文中のアンダーラインは、原文の忠実な再現である。
- 12) Tbl. 1811, I. 42b. ここで、「全側面的に」とは、「全ての側面と方向に向かって」ということである。その限りで、「永遠なるもの」の生命の「力」が例えばxから発して+の方向に向かうとすると、それと同時にまた、それと全く対立する方向-に向かっても「力」が発している。もしそうでないとすると、-の方向において「生命の不在、生命の欠如」が生じてしまうだろうからである。そうすると「xはもはや、真の生命ではない」。故に、「永遠なるもの」から何らかの「現出」がなされる時には、「それにふさわしい、……それに類似した、それと同様の……現出点が、……それと純粹に、完全に、……絶対的に対立した状態において」、つまり「同分母 (gleichnamig) であ

り、同時的であり、……究極的には同一でありながら、ただ絶対的で究極的な対立においてあるもの」が現れ出る。「何らかの現出点、何らかの現出契機の方向が与えられ、設定されると、直接的究極的にまた、それに属する、絶対的に対置させられ得る現出点とその方向も与えられる」のである。ここに、「永遠なるもの」からの「現出」は、常に“究極的には同一でありながら、その現われにおいては対立しているもの”として現われる、という原則が成立する（以上、全て Tbl. 1811, III. 7b）。

- 13) Tbl. 1811, I. 47a-b. フレーベルは、「真の統一」とは、「対立させられたものの合一、従って止揚において成立するもの」とする (Tbl. 1811, I. 47a-b)。
- 14) Vgl. Bode, a. a. O., S. 130-133.
- 15) Vgl. Bode, a. a. O., S. 134. フレーベルは、以下のような図を示している。二種の球体とは、 x を中心点として幾重にも形成され得る左図のような球体と、 x の周囲に幾個も形成され得る右図のような球体とである。各々の「現出点」(+ p と- p)の x からの距離に応じて両者は同時に形成されるが、その際、右図の球体の形成(+ p と- p 各々における+ l と- l との合一による)は、左図の球体の形成(右図の如くの球体形成を成就した+ p と- p との合一による)の論理的な前提である。



- 16) Vgl. Bode, a. a. O., S. 133, 138.
- 17) これは、「精神 (Geist)」, 「魂 (Seele)」, 「心 (Gemüt)」の領域である。
- 18) フレーベルは、「個性的球体」の実現を目指しつつある「精神」(ξ)を、ときに「個別精神 (Einzelgeist)」とも言い表わす。シュブランガーは、この記号表示においてすでに、「普遍的球体」の実現を目指しつつある「精神」(x)との関係が表わされていると言い、ξのxに対する関係を「離心 (Exzentrizität)」と特徴づけて捉えている。Vgl. Spranger, a. a. O., S. 42.
- 19) Bode, a. a. O., S. 135.
- 20) この考え方の背景には、おそらくフィヒテの思想がある。フィヒテは、「自我 (Ich)」と「非我 (Nicht-Ich)」との対立を、その自我哲学の根本原理とした。
- 21) このことをフレーベルは、「人間の使命 (Bestimmung des Menschen)」として述べる。
- 22) Entwurf-Bruchstück eines Briefes von Fröbel an Frau von Holzhausen. 日付は不明であるが、ボーデは、1811年に書かれたものとみている。Vgl. Bode, a. a. O., S. 140, Anm. 1.
- 23) フレーベルは、『人間の教育』[Hoffmann, Erika(hg.), Friedrich Fröbel: *Die Menschenenerziehung*, 1982 (以下、H II と略記)]において、前者を「内的な生命展開の自己観察 (eine Selbstbeachtung der inneren Lebensentwicklungen)」, 後者を「外的な自然現象の観察 (eine Beachtung der äußern Naturerscheinungen)」と言っている (H II, S. 96)。前者の観察様式においては、「永遠なるもの」は、専ら「神」と言われ、「自然」は「神」の「作品」として

- みられる (H II, S. 91ff)。他方で、後者の観察様式においては、「永遠なるもの」は、「力」と書き換えられ (H II, S. 99)、「自然」は、「力と空間とが一つになったもの」としてみられる (Tbl. 1816, IV. 39a)。
- 24) フレーベルは、『人間の教育』と同年に書いた論文「形と形態の学——その高次の意義と連関において (Die Kunde der Formen und Gestalten und diese in ihrer höheren Bedeutung und Beziehung)」で、「形」と「形態」の意義について述べているが、そこでは、「形」は「力」の表現として、「形態」は「生命」の表現として説明されている。Vgl. H I, S. 43-79, insb. S. 45.
- 25) H I, S. 96.
- 26) それらは、「神の行為の啓示、神の宇宙の啓示」の、「いわば二つの言語」である。Vgl. Spranger, a. a. O., S. 13f. フレーベルは、外的な「形」や「形態」の一連の系列を「精神」のそれに対称させて述べるときには、これを「自然」の系列とも呼ぶ。
- 27) 第一章、第二節(2)を参照のこと。
- 28) H II, S. 7.
- 29) フレーベルは、この三者を「神」、「自然」、「人間」と言い換えて考えることもしばしばであるが、その際、彼はそれらを「一つの同一の本質、存在の、三様に異なる契機 (Moment)」として説明している (Tbl. 1811, III. 57b)。
- 30) Tbl. 1816, V. 92b-93a, Vgl. Rinke, a. a. O., S. 119-121.
- 31) フレーベルは、一つになった δ と π とを、「 $\sigma \phi$ 」: “ $\sigma \phi \alpha \hat{\iota} \rho \alpha$ ” = Sphäre と表示している。
- 32) Vgl. Bollnow, Otto Friedrich, *Die Pädagogik der deutschen Romantik. Von Arndt bis Fröbel*, 1952, S. 123.
- 33) H I, S. 96.
- 34) フレーベルの生きていた当時は、折しも正統派キリスト教の教義がその絶対的權威を失ってしまった時代状況にあって、一方でカントの批判哲学につづくフィヒテ、シェリング、ヘーゲルによるドイツ観念論の諸体系が、また他方で、それら哲学諸体系における根本問題を自らのものとして共有しつつ、それらとは異なった道筋において問題の解決を探ったゲーテ並びにいわゆる初期ロマン派の思想家たちの思索が、またそれらの底流にスピノザやバースの汎神論ないし神秘主義思想の再評価の流れが、複雑に絡み合いつつ、ある一つの思想圏を形成していた時代であった。「自然」をめぐる当時の議論については、Weise, a. a. O., S. 10-77に詳しい。
- 35) Vgl. Rinke, a. a. O., S. 119-121.
- 36) Bollnow, a. a. O., S. 123.
- 37) 第一章、第二節(3)の註21を参照。
- 38) フレーベルは、われわれが第二章で言及した「自然」の三つの観方に準拠しながら「人間」を分類するとすれば、次のような四タイプの「自然論者」のグループが考えられるとしている。第一に、 δ の内にのみ生きる「観念論者」のグループ。ここには、フィヒテやバースが分類されている。第二に、反対に π の内にのみ生きる「唯物論者」のグループ。ここには、英仏の哲学会全体とそれに結び付いている者たちが、そしてシェリングもまた、ここに分類されている。第三に、 π の内に生きていると思えばまたすぐに δ の内に生きているような、両者の間を絶えず往来しているような「批判哲学者」のグループ。カントが挙げられる。最後に、一つになった δ と π 、すなわち「球体 ($\sigma \phi$)」 [=「生命」] の内に生きていて、人間をその完全な全体性において捉え、表現しようと骨折っている者たちのグループがある。ここには、ルソーやベスタロッチの名が挙げられている。フレーベルは、この最後のグループを、「(真の) 自然論者」、「球体家 (Sphäriker)」と呼び、自己自身もその一員とするのである。このように、フレーベルにおいては、「自然」を観る態度の問題は、ただ単に認識論的な問題にとどまるものではなく、むしろ個々人の生き方に直結する問題であった。

(博士後期課程3回生、教育史講座)